

防災・減災のページ

第124回 信濃毎日新聞社と共催

@長野・松本

むすび塾

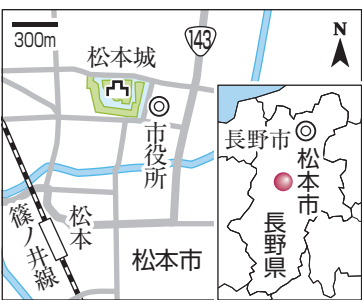
むすび塾には、地元住民と在住外国人、市職員ら計7人のほか、東日本大震災の語り部として仙台観光国際協会の職員堀野正浩さんとネパール出身の相談員ドゥワディ・パワニさんが参加した。一般社団法人減災・復興支援機構(東京)専務理事の宮下加奈さん(56)と、宮城県石巻市出身で松本大地域防災科学研究所所長の木村晴寿さん(72)が助言を務めた。

国松本城がある松本市には、海外から大勢の観光客が訪れる。2024年度の市統計によると、外国人宿泊者数は年間32万人を越えた。一方で、地域には糸魚川・静岡構造線断層帯が走り、大地震の発生が予測される。

訪日客に安全な観光地へ

河北新報社は11月20日、通算124回目の防災ワークショップ「むすび塾」を長野県松本市の信毎メディアガーデンで開いた。信濃毎日新聞社と共催で、地方紙連携の実施は20回目。災害に関わる多様な当事者が、「インバウンドと防災」をテーマに訪日客の安全確保について意見を交わした。

情報伝達 言葉の壁越え



多くの訪日客に対応するには人手が必要になるが、地域では少子高齢化が進む。市中央地区町会連合会防災部長川久保潔さん(79)は「自主防災組織は、住民の世話で手いっぱい。インバウンド対策まで考えたことはなかった」と打ち明けた。

市中央地区防災士の福沢麻衣子さん(43)は「何かやりたいと思っても、子育て世代はなかなか厳しい。若者や元氣な60、70代の力を借り

たい」と悩みを明かす。松本市には複数の大学と短大がある。木村さんは自身が関わる松本大野球部の例を挙げ「遠方出身の寮生には、何かあったらすぐ動けるように」と言っている。災害時にすぐ駆け付けられる集団を登録し、ネットワーク化するのが有効だ」と提案した。

在住外国人も、災害時の戦力になる。堀野さんは講話で「防災に関心のある外国人を募って、『せんだい外国人防災リーダー』を育成している」と紹介した。

松本ホテル花月専務の松岡一成さん(42)は「スタッフに呼びかけた。外国人は多い。仙台市の外国人防災リーダーのように、松本でも取り組んでほしい」と注文した。

議論の流れを受けて中国出身のチャイナ服専門店経営梅蘭さんは「松本に住む外国人として災害時に役に立ちたい。通訳として旅行者に情報を伝えることができると思う」と発言。川久保さんが「ぜひ一緒にやりましょう」と応じる。幕もあつた。

市観光ブランド課の勝山裕美課長(59)は「市民だけでなく、観光客、外国人を含めた全員の安全を守ろうという意識を職員で共有し、全庁挙げて対策に取り組みたい」と語った。宮下さんは「誰かを助けるためには、まず自分が助からなければいけない。自分と家族の命を守ることが、一番に考えてほしい」と参加者に呼びかけた。

市観光ブランド課の勝山裕美さん(59)は「市民だけでなく、観光客、外国人を含めた全員の安全を守ろうという意識を職員で共有し、全庁挙げて対策に取り組みたい」と語った。宮下さんは「誰かを助けるためには、まず自分が助からなければいけない。自分と家族の命を守ることが、一番に考えてほしい」と参加者に呼びかけた。

市観光ブランド課の勝山裕美さん(59)は「市民だけでなく、観光客、外国人を含めた全員の安全を守ろうという意識を職員で共有し、全庁挙げて対策に取り組みたい」と語った。宮下さんは「誰かを助けるためには、まず自分が助からなければいけない。自分と家族の命を守ることが、一番に考えてほしい」と参加者に呼びかけた。

市観光ブランド課の勝山裕美さん(59)は「市民だけでなく、観光客、外国人を含めた全員の安全を守ろうという意識を職員で共有し、全庁挙げて対策に取り組みたい」と語った。宮下さんは「誰かを助けるためには、まず自分が助からなければいけない。自分と家族の命を守ることが、一番に考えてほしい」と参加者に呼びかけた。

市観光ブランド課の勝山裕美さん(59)は「市民だけでなく、観光客、外国人を含めた全員の安全を守ろうという意識を職員で共有し、全庁挙げて対策に取り組みたい」と語った。宮下さんは「誰かを助けるためには、まず自分が助からなければいけない。自分と家族の命を守ることが、一番に考えてほしい」と参加者に呼びかけた。

訪日客にも安全安心な観光地を目指す

在住外国人に地域防災リーダーになってもらう

バス停や駅で避難先を伝える漫画やイラストを配布する

訪日客に防災訓練を体験してもらう

自然の恵みとともに災害の怖さも伝える

監修 減災・復興支援機構

イラスト さとうあけみ



インバウンドと防災をテーマに話し合う参加者
＝11月29日、長野県松本市



東日本大震災をはじめとする自然災害の被災体験を振り返り、防災の教訓や課題を考えてみませんか。町内会や学校、職場など少人数の集まりが対象です。開催費用は無料。随時、開催希望を受け付けています。連絡先は教育・防災連携室022 (211) 1591。

■むすび塾に参加して

長野・松本



●市民が対応検討 松本で被害がなくても東京や名古屋で災害が起きて交通網がストップすると、移動できない観光客であふれてしまう。市民が普段通りの生活を送る中で、どう対応するか決めておく必要がある。地区のメンバーと相談しながら、訪日客の対応も考えていきたい。



●声掛けを適切に 看護師兼保健師として、東日本大震災の被災地支援を行った。松本市には情報を外国人に伝える「多文化共生キーパーソン」制度がある。在住外国人も登録して、災害時パニックになる観光客らに多言語で適切な声掛けができれば、みんな助かるのではないかと。



●市の周知足りぬ 市は増加する観光客の防災を第一に進めようとしている。現在ホームページには多言語対応だが、周知が足りない。公務員としてまず市民を守り、観光客、外国人と全員の人の対応できるように、福祉部門や若手を交え全庁を挙げて対策を考えなくてはならない。



●ホテルが受け皿 ホテルは松本城に近く、宿泊客の半分は海外の方たち。数年前に近隣の飲食店で火事があり、スタッフを集め、宿泊客の安全を確保し、町会の協力を得て公民館に避難誘導した。災害時、ホテルは観光客だけでなく、不安な人々が集まる。しっかり備えたい。



●酷暑対策も必要 訪日客向けに松本城の観光案内をする中で、酷暑対策を含めた防災の活動は難しいと感じる。外国人は家族が心配で、観光客の支援に手が回らないかもしれない。訪日客はメールなどで正しい情報をもらえたら安心だと思う。避難所の代わりに、訪日客をホームステイで受け入れてはどうだろうか。



●自宅に招いては 外国人と言っても居住者も観光客では困ることが違う。居住者は家族が心配で、観光客の支援に手が回らないかもしれない。訪日客はメールなどで正しい情報をもらえたら安心だと思う。避難所の代わりに、訪日客をホームステイで受け入れてはどうだろうか。



●言葉より漫画で 松本にお店を出して5年目。子どもの防災の本を見て避難場所を確認したり、日本人の友達からのアドバイスで防災リュックを作ったりしている。外国人への情報発信は、言葉が分からなくても伝わる「漫画」が良いと思う。防災を学んで周りの外国人に伝えたい。